

あたりまえ

那覇市立小禄小学校 六年 仲 本 伊 吹

ぼくにとってのあたりまえ
学校で学ぶこと
友達と遊ぶこと
おいしいご飯をたくさん食べること
大好きなサッカーをやること
喜ぶこと 怒ること
泣くこと びっくりすること
とびっきりの笑顔で 笑うこと
これがぼくにとってのあたりまえ

七十年前の沖縄

その時のあたりまえはどうだったのだろう
学校で学べなかった
友達と遊ぶ時間はなかった
いつもおなかをすかせていた
サッカーは敵国のスポーツだった
喜ぶこと 怒ること
泣くこと びっくりすること
とびっきりの笑顔で 笑うこと
あたりまえに 素直にできたのだろうか

戦を起こした人たち

戦にかりだされた人たち
戦にまきこまれた人たち
その人たちにとっての あたりまえ
そのあたりまえはどんなしあわせだったのだろうか

ぼくは思う

戦なんて あたりまえじゃない
戦で生まれる「にくしみ」はあっても
戦で生まれる「悲しみ」はあっても
戦で生まれる「しあわせ」あるはずない
そして、ぼくはまた思う

じゃあ戦が終わった今、平和であってあたり
まえなのだろうか
基地がまだ残っている
不発弾処理まだ続いている
まいそうされていない遺骨がまだたくさん
残っている
それがあたりまえなのだろうか
あたりまえの戦後七十年なのだろうか

あたりまえ

だれもが「しあわせ」に思う日々
だれもが「やさしさ」にあふれた心でいる日々
だれもが「生きていること」が楽しいと感じ
る日々
だれもが自分にとってのあたりまえが
自分で選たくできること
それが
ぼくの思う平和のあたりまえ
平和のあたりまえ
しっかり作っていききたい